

COG2025 応募内容確認書

ID	24-16-1
自治体名	滋賀県長浜市
自治体提示地域課題	急速な人口減少・少子高齢化, 地域課題が複雑化し、地域内人材だけでは対応困難。大学生を呼び込む事業はすでに多いが、学生がまた関わり続ける理由と役割を持てる仕組みが求められている
チーム名	おぶかつc
アイデア名	フットサル・ホームタウン共創プロジェクト
チーム属性	学生：学生（ ）だけで構成されたチーム
チームメンバー数	2
代表者	志方 一慶
メンバー（公開）	志方 一慶, 渡邊 建一

【確認事項】

- < 応募のPDFファイル名と送付先 > 確認しました。
- < 応募内容の公開 > 確認しました。
- < 知的所有権・肖像権 > 確認しました。問題ありません。

COG2025 アイデア提案書

基本情報

チーム名:おぶかつ fc

アイデア名: フットサル・ホームタウン共創プロジェクト

該当する自治体名: 滋賀県長浜市

自治体提示の地域課題: 急速な人口減少・少子高齢化, 地域課題が複雑化し、地域内人材だけでは対応困難。大学生を呼び込む事業はすでに多いが、学生がまた関わり続ける理由と役割を持てる仕組みが求められている

アイデアの全体像

1.1 提案するアイデアのあらまし

本提案は、滋賀県長浜市において、フットサルを媒介とした地域スポーツ活動を「大学生が主体的に運営し続ける仕組み」として設計し、大学のプログラム終了後も地域と大学生が関わり続ける関係人口を創出する取り組みである。具体的には、市内の学校体育館や地域体育館を活用し、

① 月1回の交流型フットサルイベント

② 週1回程度の育成・運営活動

を組み合わせて実施する。

大学生は単なる参加者ではなく、企画・運営・広報・指導補助といった役割を担う「地域活動の担い手」として関わる。これにより、大学の授業やプログラム終了後も「自分の役割がある場所」として地域との関係が継続する仕組みを構築する。

1.2 提案するアイデアの内容

本提案では、フットサルを軸とした地域スポーツ活動を通じて、大学生と地域が継続的に関わり合う仕組みを構築する。具体的には、市内の学校体育館や地域体育館といった既存の公共施設を活用し、年間を通じて継続的に実施されるフットサル交流イベントおよび育成・運営活動を展開する。

本事業の実施主体は、大学生を中心としたチームである。大学の授業やプログラムをきっかけに長浜市を訪れた大学生が、プログラム終了後も地域と関わり続けられるよう、企画立案、イベント運営、広報、指導補助、地域との調整といった役割を担う。長浜市や地域住民、指導者はこれを支える立場として関わり、大学生が主体的に活動できる環境を整える。

本事業の対象は、地域の子ども・若者、地域住民、そして長浜市と継続的な関係を築きたい大学生である。フットサルは少人数制で参加しやすく、年齢や性別、経験の有無を問わず関われるため、幅広い層が交流できる場となる。また、大学生にとっては、単なる参加者ではなく「地域活動を支える担い手」として関与することで、地域との関係性が一度で終わらない。

事業は単発のイベントではなく、年間を通じて継続的に実施する。月に一度の交流型フットサルイベントでは、地域住民や子どもが気軽に参加・観戦できる機会を設けるとともに、週に一度程度の育成・運営活動を行うことで、日常的な関係構築を図る。これにより、大学生と地域住民が繰り返し顔を合わせる環境を生み出す。

実施場所は、市内の学校体育館や地域体育館を中心とし、既存の公共施設を有効活用する。サッカーほど大規模な設備を必要としないフットサルの特性を活かし、地域に点在する施設を拠点として活動を展開する。

このように、フットサルという継続性の高いスポーツ活動を通じて、大学生が役割と責任を持って地域に関わり続ける仕組みを構築することで、長浜市が抱える「地域と大学生との持続的な繋がり」の創出という課題の解決を目指す。

2.1 このアイデアの必要性

滋賀県長浜市では、人口減少や少子高齢化が急速に進行しており、地域課題は年々多様化・複雑化している。そのような状況の中、地域内の人材だけで課題に対応することが難しくなっており、地域外の人材、特に大学生との協働によるまちづくりが重要視されている。

年齢別人口

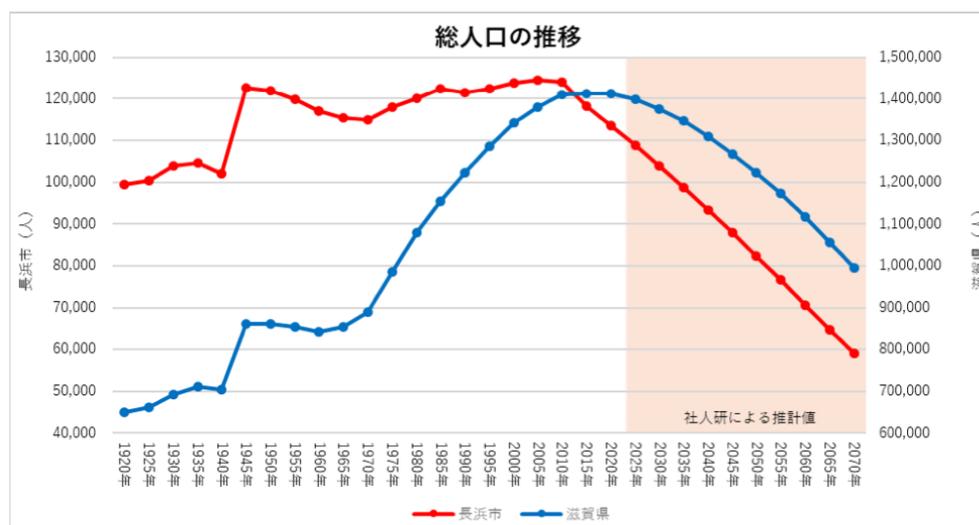
(単位:人)

	人口	人口比率	男性人口	女性人口
長浜市総人口	111,416		54,482	56,934
40歳以上の者	70,825	63.57%	33,427	37,398
50歳以上の者	56,483	50.70%	26,076	30,407
60歳以上の者	40,406	36.27%	17,908	22,498
65歳以上の者	33,437	30.01%	14,547	18,890
70歳以上の者	26,718	23.98%	11,347	15,371
75歳以上の者	19,634	17.62%	7,896	11,738
80歳以上の者	12,183	10.93%	4,464	7,719
90歳以上の者	2,895	2.60%	775	2,120
100歳以上の者	110	0.10%	13	97
世帯数(世帯)	48,054			

高齢化率

30.01%

参考:長浜市公式ホームページ

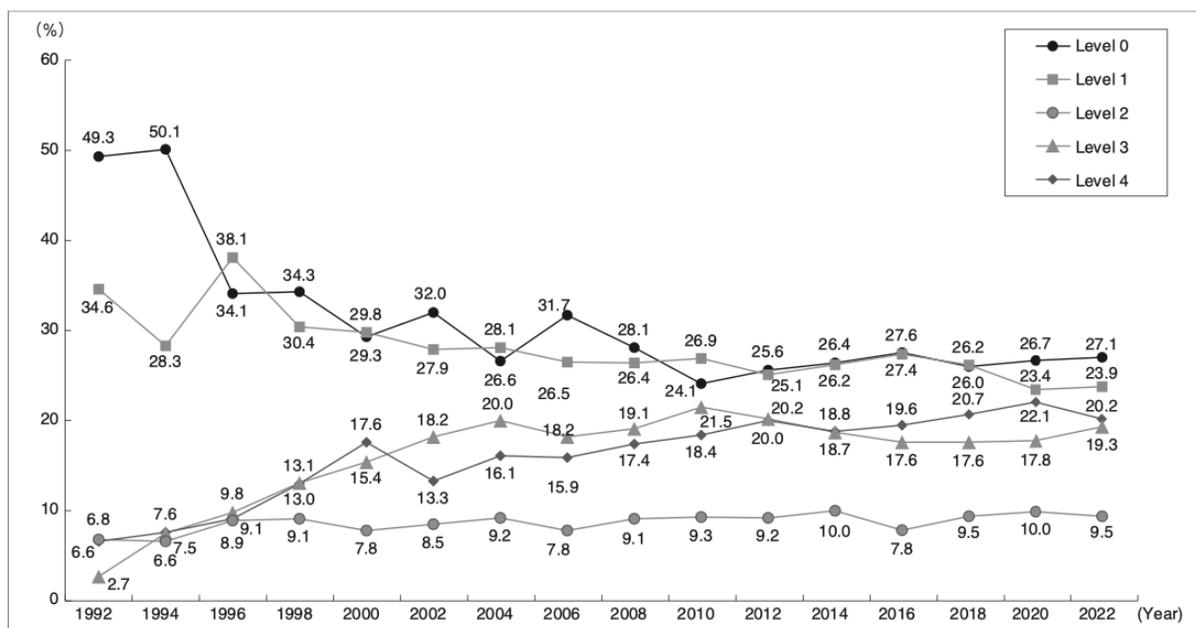


出典: 国勢調査

Table 2-1 Levels of Participation in Sport and Physical Activities

Level 0	Non-participation (0 time/year)
Level 1	At least once during the year, less than twice a week (1-103 times a year)
Level 2	At least twice a week (at least 104 times a year)
Level 3	At least twice a week, with a duration of more than 30 minutes
Level 4 (Active Sports Participant)	At least twice a week, with a duration of more than 30 minutes, and with more than moderate intensity

SSF National Sports-Life Survey (2022)



SSF National Sports-Life Survey (2022)

Figure 2-1 Rates of Participation in Sport and Physical Activities

長浜市ではすでに、大学のプログラムや授業、ゼミ活動などと連携し、多くの大学生を地域に呼び込む取組みが行われている。しかし、これらの取組みは一定の成果を上げている一方で、プログラム終了後に大学生と地域との関係が希薄になってしまうという課題を抱えている。多くの大学生が地域を訪れているにもかかわらず、継続的な関係人口として定着しない現状は、今後の持続的な地域づくりにおいて大きな課題である。

その背景には、大学生が地域と関わり続けるための「役割」や「居場所」が、プログラム終了後に明確に用意されていないことがある。大学生は一時的に地域活動に参加するものの、終了後は再び関係を持つきっかけを失い、結果として地域との接点が途切れてしまう。

本提案は、この課題に対し、大学生が継続的に地域と関わるための具体的な役割と活動の場を提供する仕組みとして位置づけられる。フットサルという継続性の高いスポーツ活動を媒介とすることで、大学生が一度きりの参加者ではなく、地域活動の担い手として関わり続けることを可能にする。

2.2 なぜフットサルなのか

本提案においてフットサルを活用する理由は、その特性が長浜市の課題解決に適している点にある。

第一に、フットサルはサッカーほど大規模なグラウンドを必要とせず、学校体育館や地域体育館など、既存の公共施設を活用して実施できる。そのため、新たな施設整備を行うことなく、比較的低コストで継続的な活動が可能である。

第二に、フットサルは少人数制のスポーツであり、競技を行う選手だけでなく、運営、審判、指導補助、広報など、多様な役割が存在する。この特性により、大学生は競技経験の有無にかかわらず、自分に合った形で活動に関わることができる。これは、大学生が主体的に役割を持ち続ける仕組みを構築する上で大きな利点である。

第三に、フットサルは年齢や性別を問わず参加しやすく、子ども、若者、女性、高齢者まで幅広い層が関われるスポーツである。定期的な開催を通じて、地域住民と大学生が繰り返し顔を合わせる機会が生まれ、自然な形で信頼関係が築かれていく。

以上の点から、フットサルは単なるスポーツイベントではなく、人と人とを継続的につなぐ「場」として機能する媒体であり、長浜市が求める持続的な関係人口の創出に適している。

2.3 社会的・教育的・経済的意義

本提案は、社会的・教育的・経済的な観点からも意義を持つ。

社会的意義としては、人口減少・高齢化が進む地域において、スポーツを通じた交流の場を継続的に創出することで、地域コミュニティの維持・活性化に寄与する点が挙げられる。大学生が地域に関わり続けることで、地域内外の人材が交わり、新たな視点や活力が地域にもたらされる。

教育的意義としては、大学生にとって、企画運営や地域調整、広報活動などを実践的に学ぶ機会となる点が挙げられる。フットサル活動を通じて培われる判断力、協調性、コミュニケーション能力は、将来の社会生活においても有用な力であり、大学教育の実践の場としても価値が高い。

経済的意義としては、交流イベントの開催により地域内で人の流れが生まれ、商店街や地元企業との連携、協賛、出店などを通じて地域経済への波及効果が期待できる。継続的な活動として定着することで、スポーツを起点とした地域ブランドの形成にもつながる。

このように、本提案は、長浜市が掲げる「地域と大学生との持続的な繋がり創出」という課題に対し、実現可能かつ多面的な価値を持つ解決策である。

3.1 実現する主体と体制

本事業は、大学生を中心とした運営チームを主軸として実施する。大学生は単なる補助的な存在ではなく、企画・運営の中心的役割を担う主体として位置づける。

具体的には、大学生チーム内で企画・プログラム設計、イベント運営、広報・SNS発信、指導補助・審判補助、地域との調整といった役割を分担する。地域住民や指導者は、技術的・経験的なサポート役として関わり、長浜市（長浜市市民協働部市民活躍課）は、学校体育館の活用調整や地域団体との連携など、後方支援を担う。このように、大学生が主体、地域と行政が伴走する体制を構築することで、大学プログラム終了後も活動が継続しやすい運営構造とする。

3.2 必要な資源と調達方法

ヒト: 大学生を中心とした運営メンバーが、企画・運営・広報・指導補助を担う。地域のスポーツ指導者やボランティアが安全管理や技術面を支援する。大学の授業・ゼミ・ロコミを通じて継続的に人材を確保する。

モノ: 市内の学校体育館や地域体育館を活用し、フットサル用ゴール、ボール、ビブス等の基本備品は既存備品や地域からの協力で確保する。

カネ: 低額の参加費、地域企業からの協賛・寄付、市民協働関連制度や補助金を組み合わせ、初年度は大きな収益を求めず持続可能な運営モデルの構築を重視する。

3-3. 実現までのプロセスと時間軸

本事業は、段階的に実施しながら継続可能な運営モデルを構築する。

初期段階(0~3か月)では、大学生運営チームを編成し、市・学校・地域団体と調整を行ったうえで、小規模な体験型フットサルイベントを試行する。

次の段階(4~9か月)では、月1回の交流イベントと週1回程度の活動を定着させ、大学生が運営の中心として継続的に関与する体制を整える。

その後(10か月以降)は、新たな大学生の受け入れと役割の引き継ぎを行い、単年度で終わらない循環型の運営モデルへ発展させる。

3.4 想定リスクとその対応策

リスク①: 参加者や大学生が集まらない

対応策

- 初期は小規模実証とし、参加ハードルを下げる
- 学校・大学プログラムと連携し参加導線を確保
- 無料体験枠や見学参加を設定する

リスク②: 活動が継続しない

対応策

- 大学生の役割を明確化し、責任と達成感を得られる設計とする
- 役割分担・引き継ぎを前提とした運営体制を整える
- 行政・地域が後方支援に回り、負担を分散する